

アイリス・マードックの道德哲学序説： その概要と実践的含意

浜 野 研 三

1. 初 め に

1970年のアイリス・マードックの『善の至高性 *The Sovereignty of Good*』の出版以来、現在の分析哲学における道德哲学の主流と目される立場とは根本的に異なった彼女の哲学的立場に基づく道德的實在論的潮流が、次第にその姿を明らかにしている。そして、1992年の『道德の導きとしての形而上学』及び1997年の『実存主義者たちと神秘家たち』の出版によって、マードックが1950年代に既にきわめて独創的で興味深い思想を展開していたことが明らかになる。さらに、前者におけるその展開が知られるようになり、マードックの思想の理解をより明確にしようとするとともにそこに含まれている洞察を展開しようとする試みがなされつつある⁽¹⁾。また、マードックのフィリップ・フットやジョン・マクダウェルなどへの影響も明らかにされている。このような流れのうちに豊かな洞察が含まれていると考えるゆえに、本論文においては、マクダウェルやコーラ・ダイヤモンド、そして彼らの思想を受け継ぎ深化させようとしているアリス・クラリーなどの説明を援用しながらマードックの道德的思想の基本的内容を紹介し、その実践的含意を示すことにする。極めて斬新で大胆であるゆえに強い反発を招くものであるマードックの思想に関する詳しい説明と検討はいまだ準備不足であるので、他日を期したい。ここでは、何よりもその斬新な思想の内容を素描し、かつそれが持つ注目すべき実践的帰結について筆者の考えを説明することにする。

2. マードックの基本的立場

マードックは、すでに 1950 年代に事実と価値の区分という、R. M. ヘアの立場が代表するような、分析哲学においていわば公理のごとく受け入れられてきた前提を批判している。「勇気がある」というような価値をビルトインした概念、バーナード・ウィリアムズが有名にしたいわゆる厚い概念（**thick concept**）と通じる種類の概念の在り方を指摘し、その当時想定されていた度合いを遥かに超えた、事実と価値のきわめて緊密なつながりの存在を指摘してきた。そのような事実と価値についての緊密なつながりという考えの下に、自然主義的誤謬といわれているものの常識的理解の背後にある、価値的要素を一切持たないいわば生の事実から価値的命題を導き出すことはできないという考えの前提を批判していたのである。それは、生の事実とそれに対する態度表明としての価値判断という、事実、価値、および価値判断、そして自由に関するその当時当然の前提として受け入れられていた理解に対する、斬新な代案の提出であった。さらに、マードックは、そのような前提自身が一定の道徳観に支えられたものであり、それを保持している人々が理解しているような中立的な前提ではないことも指摘し、深刻かつ含蓄のある批判を行っていた⁽²⁾。

[客観的事実・自由な意思による価値選択・欲求から行為へ]

マードックによれば、主観的な観点をできる限り排除した真に客観的な観点から捉えられた事実や世界に関する認識・判断という、親しみ深い考えの基礎になっている自然科学の権威を無防備で受け入れる態度こそが、当時の支配的道徳観を背後に支えている。そこでは、自然科学が示す生の事実に対してどのような価値観を取りそれに基づく価値評価・判断を下すのかは、道徳的原理に関する個人の自由な選択にまかされている。自由はまさにそのような原理に関する選択において発揮される。このことから知られるように、分析的道徳哲学の内にサルトルなどの実存主義と通底するような自由についての考えが見て取

れるとマードックは指摘している。ここには、人々が「同一の理性的に理解可能な世界⁽³⁾」に住み、そのような世界の諸事象に対し意志により価値に関する判断・決断・選択を下すという像が前提されているのである。マードックは、通常は相対立していると見える実存主義と分析的道德哲学の間に、世界の客観的認識と向かい合いつつなされる意志による自由な選択と行為という、選択を中心に据えた自由概念と、純粋に客観的な世界認識を目指すという世界理解の面での共通性を明確に指摘している⁽⁴⁾。

さらに、この考えには、生の事実の認識だけでは、行為はなされず、行為の実現のためには、欲求という行為主体の動機が付加されなければならないという考えをも伴っている。行為は、生の事実の認識と、それを実際の行為にもちきたらすための欲求という情緒的な要素が加わって初めて成立する。たとえある行為の理由となりうる事実の認識が成立しても、それだけでは、行為を可能とする力を持たないため、欲求といういわば動力源が必要とされるのである⁽⁵⁾。

[道徳的認識の吸引力：事実と価値のより緊密な関係]

このように、自然科学によって明らかにされるような世界についての客観的事実について、各個人が自由に選択をした価値に基づいて価値評価・判断を下す、という現在のわれわれにもなじみがあり明瞭で受け入れやすい像が分析的道德哲学と実存主義によって共有されていることを指摘したうえで、その像に対してマードックは疑問を挟みそれに代わるより現実の人間の道徳的生活の在り方に即していると筆者が考えている像を提出した。

事実と価値のより緊密な結びつきの指摘とともに、価値的事実の行為促進的働きをも指摘しつつ、マードックはさらに、われわれの意識には常に道徳的次元が存在していると主張している。この最後の主張は極めて斬新でありかつ深刻な含意を持つものである。それは事実や自由に関する認識についてのわれわれの理解を大きく転換することを要請している。道徳的観点などが一切排除されたところに成立する厳密に客観的な生の事実の認識・意識などの存在を否定

し、事実と価値、理性と意志、認識と欲求などの二元論的な枠組みを批判しているのである⁽⁶⁾。

プラトン主義者として知られているマードックは、善のアイデアが他のすべてのアイデアを支配する事態に類比的に、価値評価・判断を伴う事実の認識は、行為を引き起こすいわば磁力をも有すると考えるのである。行為の理由が同時に行為を引き起こす力を発揮する。しかも、価値に実在性を付与するのである。ヒュームのように、主体の側の反応が世界に投射されたものとは考えないで、価値は実際に世界のうちに存在すると考えるのである。このような考えは、先に述べた、事実と価値の区別の不可能性を前提としている。すなわち、われわれの事実認識のうちに道徳的・規範的次元が伴っており、そのような広い意味での事実認識から、行為が生じるのであり、また、その事実認識は、世界の規範的次元の認識にかかわっているのである。その意味でマードックは、道徳的実在論を取り、認知主義の立場をとるのである。そして、マードックは、意識には常に道徳的次元が伴うという大胆かつ興味深い説を『道徳への導きとしての形而上学』においてより詳しく展開している。この主張を別の表現で述べるならば、すべての言説には道徳的次元が伴っているという主張ということになる。補足として、今述べた最後の主張に収れんする分析的道德哲学とマードックのそれとの根本的違いに関するコーラ・ダイヤモンドの説明を紹介しておく。

[不斷に道德家であること：人間存在の根本的道德性]

コーラ・ダイヤモンドはヘアに代表される分析的道德哲学とマードックの道德哲学の違いを、まず、次のような違いから説明する。両者は、価値的前提を明らかにしない形で事実から価値判断を含んだ結論を導く誤りの存在を認めている。しかし、前者にとっては、それは単に論理的な誤りと理解されているのに対し、後者は、そこに、事実の回避というような道徳的責任を果たすことにおける失敗を見る。マードックにとって、上記の誤りは、道徳的観点から考察されるべきものである。ここに、上記の誤りに関する論理的問題としての

理解と道徳的責任にかかわるものとしての理解という基本的な観点ないし、道徳的思考に関する理解の違いが表れている。分析的道德哲学の基本的考えとの相違は、マードックによれば、道徳における合理性や道徳的概念の本性、自由の行使、道徳的注意を要求する状況におかれるとはいかなることであるのか、などについての理解のあり方という根本的な部分における相違であり、しかもその相違は、中立的な哲学的分析による解決が可能などという意味での論理的なものではない。それは、何よりも、道徳それ自体についての理解に関する相違なのである⁽⁷⁾。表現を換えれば、上で述べた事柄についての理解は、ある人の道徳的存在の根本的部分をなすものである。したがって、分析的道德哲学はその基本的前提において、一定の道徳的立場をとっており、他の立場を排除しているのである。そのことに気付かず、中立性を保持していると主張していることに分析的道德哲学の致命的な欠陥があるとする指摘に、マードックの批判の眼目がある。

実際、道徳的概念は状況の理解を形作り、違った道徳的概念を使用した場合には、異なった状況の理解が生まれうるのである。その相違は、「ゲシュタルトの全面的な相違のような」ものでありうるのである⁽⁸⁾。そして、ダイヤモンドによれば、マードックは論を進めて、まさに分析的道德哲学とは根本的に異なった道徳に関する理解の可能性を提示する。そのような理解を表現するのにふさわしい言葉として、ダイヤモンドは、サミュエル・ジョンソンの「われわれは不断に道德家である（**we are perpetually moralists**）」という言葉を選び、それを自分の論文のタイトルにしている。それが意味するところは、「何であれ、それに関するわれわれの思考は、道徳的に生き生きした意識の、それ自身の道徳的性格を持った意識の思考であること」を意味している⁽⁹⁾。マードックは「価値の偏在性」、「われわれの意識の流れは、道徳的判断の担い手である」などという表現も用いている⁽¹⁰⁾。

そのような不断に道德家である人間の在り方を示す一つの例として、ダイヤモンドは、「ある人の人生の中で道徳的概念がいかに発展し変化しうるかを示す書物」アレクサンダー・ワットの『わが世紀』の一節を挙げている。それ

は、ポーランドを訪れたポール・エリュアールと友情を培ったワット夫妻が、エリュアールが、前年作った妻を失った悲しみを詠った詩の最後の部分を、[フランス共産党の書記であり実権を握っていた] 同志トーレズの、プロレタリアートの魂を悲しみで毒することをするべきではないという言葉に従って、書き直したという言葉聞いたという説明の後の叙述である。すなわち、「われわれはほとんど彼との関係を断つところであった……例えば、プロニエウスキー—晩年のほとんどすでに破壊された人間であった彼について語っているのではない—はそのようにふるまうことはできなかったであろう。われわれのどれもがそうであった」と述べているところである⁽¹¹⁾。「[この一節のうちの、] 友情、人格の統合、勇気、真実などの概念の存在は、語りの全体、その動き、人間についての理解、それ自身が示す勇気や正直さを伴った性格に全面的に依存している」とダイヤモンドは語っている⁽¹²⁾。ダイヤモンドが挙げている概念は引用された一節には一切明らかな形では、現れていないが、その語り(narrative)の在り方により、それらの概念によって紡がれる道徳的思考は、読者の感受性に影響を与える。このような例が示すような数限りない経験を通して、ワットの道徳的概念、したがって、彼の道徳的存在は発展し変化してきたというのである。その成果は散文を通して読者の感性に変化をもたらし得る。以上のように、ワットなどの例を用いながら、現実を正しく公正に眺め、それに対して適切な態度をとるための不断の道徳的努力がなされる中で、そのような不断の道徳的努力・態度により、人の道徳的存在が形成されてゆくのであるとマードックが考えていたことを、ダイヤモンドは示す。

このように、マードックは人間を根本的に道徳的存在とみなし、認識と行為の両方に道徳的次元が伴っているという、きわめて斬新な世界観・人間観を提出したのである。ここで、今までの説明を踏まえて、マードックが提出した像の基本的要素を記しておく。

- a. 事実と価値の分離の否定。
- b. 道徳的實在論：規範的事実の實在。
- c. 認知主義：規範的事実の認識の真偽について語ることが有意味。

- d. 行為の理由がそれ自身で、すなわち、欲求の関与なしに、行為を生み出
しうる。
 - e. われわれの意識には、したがってまたわれわれのすべての言説には、道
徳的次元が伴っている。
- 以下、この像の意味するところをより詳しく説明してゆく。

3. ウィトゲンシュタインの洞察とその展開： 生の形式・感受性の訓練・徳の陶冶

マードック自身もウィトゲンシュタインの影響を受けていたとされているが、本格的にウィトゲンシュタインの洞察を生かした議論は、ダイヤモンド、マクダウェルやキャヴェル（Stanley Cavell）によって展開されている。ここではまず、キャヴェルの洞察を生かしたマクダウェルの議論を紹介し、ウィトゲンシュタインの議論がマードックの思想、殊に a, b, c, d と名付けた主張の説明と擁護に用いられ得ることを示すことにする。

[規則に従うことと生の形式の一致、めまいに耐えること]

マクダウェルが着目するのは、『哲学探究』における、規則に従うことに関するウィトゲンシュタインの名高い考察である⁽¹³⁾。その考察で批判される考えは、ある人の行為が一定の規則に従っているかどうかについて、無限に続くレールという比喻によって表されるような明確に定式化可能な規則の存在を想定し、その規則との合致の有無によって、問題の人の行為が規則に従ったものであるか否かが判別することができるという考えである。このような考えに対し、ウィトゲンシュタインは有名な例を用いて批判した。たとえば、1, 2, 3, 4, …というような数の列をいくら連ねたとしても、その人が1を加えるという規則に従っているということを疑問の余地なく主張することはできないと言うのである。すなわち、1000までは、通常の形でその規則に従っているようにふるまっても、1000を超えてから、1002, 1004, 1006…という仕方では、

1を加えるという規則とは異なった規則に従っていたことを示す振る舞いがその人に示される可能性をゼロにすることは不可能なのである。

ウィトゲンシュタインは、まず特定の規則を理解しそれを心に浮かべながら、あるいはそれを念頭に置きながらなされる心的状態を用いた説明では、全く不十分であるとしてそのような種類の説明を一蹴する。さらに、実際になされた行為、その人の目に見える反応による判断基準を持ち出したうえで、それによってさえも確実な判断の可能性を確保することはおぼつかないことを指摘する。

以上のような通常の説明の後にマクダウェルは、キャヴェルの著作の有名な素晴らしい一節を引用して、この問題に関する自らの理解するウィトゲンシュタインによる解決の在り方を示す⁽¹⁴⁾。

われわれはある文脈で語を学び、また教える。そして、それらの語を更なる文脈に対して投射することを期待され、また、他者に期待する。何ものもこの投射が起きること（ことに諸々の普遍の把握や規則書の把握など）を保証しない、それはちょうど何ものもわれわれが同一の投射を行ったり、理解したりすることを保証することがないのと同様である。全体的に見てわれわれがそのようなことを行うということは、次のような諸々のことにかかわっているのである。すなわち、興味や感情の道筋、反応の様式、そしてユーモアや意義や充足の感覚、何が法外であるか、何がそれ以外の何と類似しているか、何が非難であり、何が許しであり、いつ発話が主張であり、懇願であり、説明であるか等々の感覚などをわれわれが共有していることにかかわること、すなわち、ウィトゲンシュタインが「諸々の生の形式 (forms of life)」と呼んだ有機体の渦巻き全体 (all the whirl of organism) の共有にかかわることなのである。人間の発話や活動、正気であることと共同体はこれ以上でも以下でもないものに依存しているのである。それは、単純であると同様に「受け入れることが」難しく、また恐怖を引き起こすと同様に難しいヴァイジョンである⁽¹⁵⁾。

ここで言われていることは、われわれが、全体的に見て、同様なまた理解可能な行動パターンを示し、その結果、われわれの通常の生活が可能になっているのは、上の引用で言及されているような、諸々の感覚や態度が共有されているという端的な事態が基盤として存在しているからである。この共有という事実は、われわれが一定の同一の規則を自覚しているという事実や、事態についての何らかの同一の解釈の共有の事実ではない、そのような媒介者を介さない、まさに端的な事実として存在しているのである。そのような言わば生の事実の存在にわれわれの生活が根本的に依存しているという事態の認識が、めまいを惹き起こすのである。このあまりに不十分な基盤に直面して起きるめまいから逃れるために、今述べたような、規則や解釈のような媒介者が援用されるのである、とマクダウェルは考える。彼によると、それらは、「慰めを与える神話でしかない⁽¹⁶⁾。」そのような逃避ではなく、当の事実をそのまま受け入れ、それが人間という存在に関する端的な事実、人間的生の基盤であることを受け入れる態度こそが、マクダウェルが推奨する態度である。

[客観性と現実に関する拡大された理解：デネットとの類縁性、世界の再魔術化]

さらに注目すべきことは、共有されている有機体の渦巻きとして様々なわれわれの主観的な感受性が挙げられていることである。通常の伝統的な理解からすれば、そのような主観的な感受性の要素は、認識を歪めるものとして、排除されるべきであり、そのような排除によって、はじめて客観的な理解、正しい認識、またそれに基づく行為が可能になるはずである。しかしマクダウェルは、そのような客観的認識に関する理解を受け入れない。逆に、そのような主体の側の主観的な感受性の反応に基づいてこそ、はじめて認識できるパターン、また、それが示す現実の側面があるのである。適切な態度とは、このような主体の側の感受性の反応や態度を排除するのではなく、それらによって現実の側面が明らかになると考え、それらに実在性を付与する態度なのである。

自らの価値の実在論を説明し擁護するために、マクダウェルは、二次性質と

価値の類比性を論じている。たとえば、われわれは様々なものを、赤い色をしたものとして取りまとめるのであるが、そのような一定のパターンを示すものとして取りまとめを行うことは、まさに赤さを感じするという主体の側の経験抜きにはあり得ない。赤を物理的に規定することはできるかもしれないが、そもそもそのような取りまとめが行われるのは、まさにそれらの多くのものがわれわれに赤く見えるという事実によっている。その意味で、赤なら赤という色の認識には、われわれが持つ赤さを感じするという主体の側の経験抜きには理解できないのである⁽¹⁷⁾。

マクダウェルはこのように二次性質と類比可能な側面を指摘しながら、価値の実在論を主張するのであるが、このような考えは、デネットの三つのスタンスの理論に極めて類似した考えと言うことができよう。デネットによれば、物理的、デザイン的、志向的という三つのスタンスを使い分けることによって、われわれはこの世界の中で生きてゆくことができる。それぞれのスタンスをとることによって見えてくるパターンが異なり、どれか一つのスタンスをとらないと、われわれの生活は成り立たない。デネットは、それらのパターンをリアルなパターンと呼び、一定の実在性を付与している。まさに、一定のスタンスをとることにより、別のスタンスをとっているときには見えないパターンが理解できるようになるのである。事実、われわれが物理的スタンスをとり、たとえば、他の人間に対して、その生理的過程の理解や構造のみに着目して相手の行動を理解し、予知しようとしても、ただ困惑するだけであろう。しかし、まさに志向的スタンスをとり、相手がどのような信念や意図を持っているかを探れば、その行動を理解し予知することがより容易になる。実際、われわれはそのような形で日々の生活を送っており、特別な事態を除き、支障なく生活しているのである⁽¹⁸⁾。

このようなデネットの思想にも通じる考えの下に、マクダウェルは、どのような態度をとるのかによって、われわれの認識が狭小で誤ったものになる可能性、逆により良い態度をとった時に実在についてのより正しい認識が可能になるという立場をとる。そして、主観的態度やそれに基づく反応に基づいた認識

の対象に実在性を付与するという、より広い意味での客観的認識の概念を主張するのである。しかも、道徳の対象は、それに対する一定の反応に値するという規範的次元を伴った対象として認識されているのである。上で述べたように、このような感受性の反応を伴った認識を客観的な認識のうちに含めることは、実在に規範的要素を含めることを意味している。これは、マクダウェルの言う世界の部分的再魔術化の意味するところを明らかにしているといえる。バーナード・ウィリアムズが述べたような世界に関する絶対的な理解、すなわち主観的な個別の視点からできうる限り独立した、科学革命後の自然科学的世界像が追究する究極的に客観的な世界像、さらに、先に述べたような他者の行為に関するある定まった規則に従っているという理解について、マクダウェルはウィトゲンシュタインの有名な議論を援用しながら批判している⁽¹⁹⁾。特に道徳的な行為の理解についてはなおさらそうである。マクダウェルは、それを体系的な規則集の制作の不可能性（*uncodifiability*）と呼んでいる。したがって、必要なことは、個々の事例について注意深く適切な態度を持って対象・事態に臨むことが要請されるのである。これは、後に述べるマードックの愛情に満ちた公正な眼差しとともに対象を理解しようという態度と共通するものであり、その態度を強化する議論を提供しているといえることができるであろう。

[魂への態度の基盤としての性格]

筆者はこのようなマクダウェルによるウィトゲンシュタインの議論を援用したマードックの思想の擁護に接するとき、ウィトゲンシュタインの有名な、魂への態度についての一節を思わざるを得ない。すなわち、われわれは、解釈や思考という媒介物を経ることなく、端的に、他の人間に対して魂に対する態度をとることを指摘している一節を思わざるを得ない。ウィトゲンシュタインによれば、「私は彼が魂を持っていると考えているのではない」のである⁽²⁰⁾。そうではなく、端的にそのような態度をとるのである。このような魂への態度という、一定の道徳的態度を保持してこそ、他の人間についてのより正しい認

識・理解が可能になる。通常の意味での人間に対する対応は、まさにこのような態度を保持することにより可能になっているのであり、そのような態度が開く場の中でこそ、自由な、こだわりのない道徳的思考や判断が成り立つのである。それに先立ち、そのような態度を導き正当化する思考などは存在しない。魂への態度は固い岩盤であり、他者や自己に関する探究や思考もそこから始まるのである。このように、マードックの思想の説明や強化のために、上述のマクダウェルやウィトゲンシュタインの議論を援用することができるのである。

[マクダウェルの第二の本性とマードックの感情教育論：自我の誘惑にこうして]

また、ウィトゲンシュタインは上記の共通の基盤の形成に関して、訓練の大切さを述べているが、マクダウェルは、ウィトゲンシュタインの議論のこの側面も使用し、第二の本性という考えを展開している。われわれは、教育を受けることによって、当の能力を発揮できるようになるのである。この第二の本性と呼ばれる能力は、事態の適切な側面の理解を可能にし、適切な対応・行為の在り方を受け入れ、それを実行することを可能にするのである。このような訓練についての議論に関して、マクダウェルはあまり多くを語っていないが、マードックは、想像力や注意という概念を用いてより有益かつ興味深い議論を展開している。この議論は、上で挙げたマードックの主張 e と結びついている。それは同時に、芸術、殊に文学的散文の持つ感情教育への貢献という考えをも導くものである。

マードックは、健全に働く想像力といびつな仕方で働く想像力を区別し、後者がファンタジーを生み出すとしている。それは、「肥え太った容赦ない自我 (fat, relentless ego) ⁽²¹⁾」の誘惑に負けて、対象をそのものとして見ることに失敗し、確かな認識が得られず、自己に都合がよい形での、現実に関する歪んだ認識を持ってしまうわれわれ人間の在り方を指摘したものである。このような肥え太った自我の誘惑に惑わされずに現実に関するより明確で確かな認識を得るために要請されるのが、マードックが「愛情に満ちかつ公正である眼差し

(loving and just gaze)⁽²²⁾」と呼んだものである。このような眼差しを働かせるためには、現実をありのままにみるために道徳的エネルギーを用いて、ファンタジーにまどわされないように、注意力を傾ける努力をなすことが必要である。自己に惑溺した道徳的に腐敗した注意ではなく、自己に固執することなく対象の独立性、他者の他者性をつぶさに見ようという、道徳的エネルギーによって支えられた、注意深い正確な認識のための努力が不可欠なのである。それなしには、われわれは、容易に、自己に都合がよい偽りに満ちた認識を正しいものと思いなして、偽りの生を送ってしまう。そのような罠に陥ることを防ぐために、誠実で真摯な正しい現実の認識を求めている努力と、そのような注意力とそれに応じた感受性の訓練が必要である。むしろ、そのような注意力、想像力の涵養は一朝一夕になるものではなく、日々の努力の中で徐々に形成可能なものである。このような努力に資するものとして 19 世紀のレアリズム小説の意義が存在するとマードックは考えている。このような考えが、ダイヤモンドやマーサ・ヌスバウムの道徳的思考の中に文学を取り入れてゆこうという動きと結びつくのである。

「愛情に満ちかつ公正である眼差し」を涵養することの重要性を訴えたマードックはまたわれわれの認識が、いわば道徳の磁場でなされていること、われわれの世界はすでに道徳的価値によって色づけられているという主張をなしていた。さらに、マードックは、現実の複雑さ、汲み尽くしがたさについて語り、想像力を健全な形ではたらかしながら、現実の多様な側面の理解を深化することの大切さを説いている。このような態度から、善についても悪についてもより深刻な理解の可能性が生まれ得る。これは、謙遜さという道徳的価値を実現する仕方であり、すなわち謙遜な態度で対象に向かうことによって、はじめて対象がより明らかな形で自らの姿を現してくるという、マクダウェルの主張に対応した考えであるということができであろう。また、現実の複雑さ、汲み尽くしがたさは安易な規則化を許さず、細部に注意深く目を走らせながらの個別の事例に対応する態度をも支持するのである。

このような愛情に満ちかつ公正な注意の下に、現実を正しく見ようとする道

徳的努力によって支えられた努力の成果の例を、マードックは一つ挙げているので紹介しておく。これによって、マードックが思い描いているものがいかなる事態であるのかがより明確になると思われる⁽²³⁾。

例として、マードックは、息子の妻 **D** に対して敵意を抱いている女性 **M** の認識の変化を描いている。**M** にとって **D** は「親切だが、出しゃばりで、なれなれしく、下品とまではゆかないが、明らかに洗練されていず、品位や優雅さに欠けている」等々の好ましくない性質を備えている。しかし、**M** は理性的で反省能力も自己批判の能力も備えている女性である。ある時期から、**D** と接触する機会がなくなる境遇の中で、**M** は **D** を今一度よく理解してみようとし、その結果、**M** は「粗野ではなく爽快なほど気取りがなく、品位に欠けるのではなくわざとらしくなく、騒々しいのではなく陽気であり、飽き飽きするほど未熟なのではなく快い仕方で若々しい」、等々の仕方で、**M** についての認識が変化した場合を正しい認識への変化の例として挙げている⁽²⁴⁾。この場合、その変化が起こるまでに、**M** は内的な戦いに携わっていたのである。彼女は、今一度 **D** を理解するために注意を集中している。**M** は正確に見ようとしているだけではなく、愛情を持って、また公正に **D** を見ようとしたのである。それによって **M** は歪んだヴィジョンではなく、明晰なヴィジョンを得ることができた。まさに現実を正しく捉えることができたのである。そして、マードックは、ここでは、不可避免的に「現実」という語は、規範的語であるように見えるとしている。**M** は、ありのままの **D** を、道徳的努力と注意によってみることができた。この明晰なヴィジョンは、徐々にたつ知覚の変化によって得られた道徳的達成であり、ファンタジーではなく正しい認識を得ることにより行動が自然に決まるという意味で、自由の獲得でもある。

このように、人間の道徳的存在であることから帰結する、人間が道徳的磁場を離れて生きてゆけない事実を強調するマードックの思想から、実践的帰結を導くことができる。次にそれについて説明し、最後により一層の実践的意味を見出すための考察を行うことにする。

4. 実践的帰結とそれに関連した考察－現実の困難さ

マードックが主張するように人間が不断に道徳的存在であるとするならば、そしてその道徳的存在として有する道徳的世界観に裏打ちされた生命への態度が、われわれの一挙手一頭足に至るまで、影響を与え、またそれらの影響を受けるとすれば、われわれが、様々な決定をなす際に、より一層の謙虚さと慎重さを持つ必要を感じざるを得ない。その必要とは、われわれの認識を支えている道徳的次元の質を高めるための、日ごろの注意力、それを支える謙虚さと想像力の育成に力を傾ける必要である。マードックは、愛情に満ちかつ公正である眼差しについて語っているが、まさにそのような眼差しを獲得するための、いわば自らの感情教育が道徳的義務としてわれわれに課されることになる。そのような習練が積まれないとき、多くの事柄についてのわれわれの認識は、道徳的に質が低いものとなり、対象となっている事物や事態に関する低い質の判断、それに基づく道徳的に問題視されうるような行為をなすことになる。たとえば、これが終末期医療などのような人の生死や、生の豊かさが確保されるか否かという重要な問題にかかわるとき、認識・判断の質の在り方が極めて重要なものであることは言を俟たない。

たとえば、ALS の患者の生の豊かさについて、往々にして至極安易に否定的な判断を下しがちであるが、実際にそのような判断とは異なる事態が報告されているのである。同様に、遷延性意識障害の患者についての認識も以前は、きわめて貧しい生の在り方、ただ呼吸をしているだけ、というような認識が通常であった。しかし、そのような判断に反して、意識を回復した人の事例、それどころか、きわめて豊かな生を営むまでに回復した事例が少なからず存在している。このような事例が発見された背後には、患者の可能性にかけて、まさに愛情に満ちた公正な眼差しとともに、日々の関係を続けていた人々の存在があげられる。逆に、遷延性であれば、一律に回復不能であるという以前の医学的常識に依存し、道徳的存在としての自らの存在をかけた、適切な認識獲得の

努力がなされなかった場合が多数存在し、今も存在しているのである⁽²⁵⁾。

むしろ、同様な事例は、生命倫理にかかわるものだけではない。様々な差別を生み出し、それを支えているわれわれの訓練されていない道徳的感受性は多くの非劇を生んでいる。周知のように、殺人犯永山則夫の道徳的存在を歪め、ついには残忍な犯罪を犯すに至らしめるような道徳的錯乱状態に陥らせたものは、彼を取り巻く人々や社会の愛情や公正とは無縁な、安易に単純な分類をして能事終れりとする態度であり、それを生み出す道徳的感性である。このような眼差しに基づく認識・態度そして行為が、様々な障害や不幸に苦しみつつそれに立ち向かっている人々の足を引っ張ってしまっているのである。

それ故に道徳的感性の訓練が大切なのである。しかも、われわれが不断に道徳的存在であるという事実は、われわれの一挙手一頭足にわれわれの道徳的世界観・感受性が表れていることを意味しているのであるから、より注意深い態度の育成とともに、安易に事柄や人を型にはめてしまわない、謙遜な態度を持って生きてゆくことが大切であることになる。実際、ドストエフスキーと言葉とされていると私が記憶している「新聞の一行の背後に一人の人間の一生がある」という趣旨の言葉が明らかに表現しているように、われわれが日々遭遇している様々な事柄や人々は、きわめて複雑であり、単純な概念・言葉によってはとらえきれない多様で複雑な側面を持っているのである。したがって、謙遜な態度は、その複雑で一筋縄ではゆかない現実に対応する適切な態度ということができるのである。

ただし、この感受性の洗練は、個人の努力だけで可能というものではない。われわれが、言語を習得するために、他者による訓練が必要であったように、そして実際日々何らかの形で他者との接触は避けられないのであるから、人々の関係が豊かなものになるような制度的な枠組みの設定と、その制度が適切に機能するための個々の運用主体の努力もまた不可欠である。しかも、問題となる感受性の訓練のためには、個別の事態に注意深く対応する努力が要請されるため、ただ大まかなスローガンのような原則などを教えても、十分とは言えない。真に繊細な感受性の涵養には個別の状況における具体的な実践が最も有効な方

法なのである。それは、もちろん、何かを教えようとするのではなく、謙遜な思いを持ちつつ、できうる限り注意深く状況の種々の側面に目を届かせながら、判断を下し、行為し、その帰結を反省しつつ、次第に感受性・注意の質を高めてゆくしかないのである。むろん、多くの道徳的に批判されるべき行為をなしている政治家が国家権力を用いて、道徳教育なるものを押し付けようとすることは噴飯ものであると同時に、歴史に照らしても明らかなように危険極まりないものであり、それは阻止されねばならない。このような問題についてこそ、民衆の自発的な努力を中心にした展開が期待されるのである。

言わずもがなではあるが、われわれは、常にしゃちこぼって行為をしなければいけないなどということを主張しているのではない。それではいかにも道学者流の窮屈な生活しか送れないことになる。私が考えているのは、チェスタトン (G. K. Chesterton) が述べるような、日々の生活で出会うものや人に対して、それらを途方もない、とるに足りないもの (**tremendous trifles**) と捉えるような感受性に基づく対応である。人や他の動物やものなどに対してとるに足りないものと捉えるということは、語弊があるが、言わんとすることは、仰々しく敬うこともなく自然に淡々とした態度をとりながらも、他方において自分が向き合っている他者がきわめて複雑な歴史を持ち、またそれによって培われた多様で複雑な感受性を持った存在であることを念頭に置くことである。ものの場合は、感受性は持たないが複雑な過程を経て自分の前に現れているものであることを念頭に置くのである。毎日の生活の中で、人間や物の途方もない複雑さについて取り立てて云々することもなく、しかしその存在に対する謙遜な態度を保持しながら適切な注意を払いつつ対応することが必要であろう、ということである⁽²⁶⁾。

[現実の困難さと向き合うこと]

このような態度に関連して、ダイヤモンドが、ジョン・アップダイクの「現実の困難さ (**difficulty of reality**)」という言葉を使っている。その一つの例として、J・M・クッツェーの小説の主人公が、人間の動物に対する残酷な取

り扱いに傷つくとともに、そのおぞましき事態に対する他の人々の無関心に傷ついている状態を挙げている。すなわち、主人公エリザベス・コストロにとって、そのような傷を負わざるを得ない経験は、「現実の中に存在するあるものを、われわれがそれについて考えることに抵抗し、あるいは、その不可解性において苦痛を感じさせるものであり、そのような仕方では困難である、あるいは多分、その不可解性の点で、恐ろしくかつ驚くべきものであると捉える、ような経験」と説明している。このような「深刻な魂の混乱」は、主人公以外の経験をも示されることによって多様な経験や反応に触れ、より一層われわれの道徳的思考の質と広さに影響を与え得る⁽²⁷⁾。これは端的に現実には自らをさらすことであり通常の意味での議論ではないが、われわれの道徳的思考の重要な一要素として重要な働きを持っている。このような仕方での高い質の道徳的思考能力の育成も、アリストテレス的な言葉を用いれば、徳の涵養のための努力の一環ということになるのである。

このような考えは、少し飛躍ではあるが、パスカルの「心は、理性が知らないそれ自身の理由を持つ」という言葉が表すものとの類比性を感じさせる考えである⁽²⁸⁾。いやむしろ、マードックやダイヤモンドは、心と理性を明確に区分することをやめて、それらが融合した思考の在り方を追究しているといったほうがより実情に近いと考えられる。実際、彼らの思想を展開しようとしているアリス・クラリーは、ギルバート・ライルがジェイン・オースティンの精神ないし心（mind）を冠詞抜きで使う時に表しているものは、「単に知能や知性ではなく、意識し、思考し、感じている人の複雑な統合全体」であるという一節を肯定的に引用している。さらに、クラリーは、ライルの中心的テーマが、「言説にかかわる実践における能力は、変わることなく、反応をなす諸能力を含んでおり、そのような諸能力を訓練することは、それゆえ〔実践的能力の訓練〕そのものとして、知的能力を生み出しうる」と述べている⁽²⁹⁾。

われわれの生活は、われわれの気づかない場合がほとんどであるが、様々な現実の困難さを感じさせる事実で満ちている。その一つが、核爆弾の持つ想像を超えた破壊力が大きな災厄をもたらす可能性とわれわれが隣り合わせに日々

を過ごしている事実である。その事例を述べれば次のようなものである⁽³⁰⁾。
1979年11月9日当時のアメリカの国家安全保障アドバイザーのズビグネフ・ブレジンスキーは夜中の**3時**に電話で起こされ、ソ連から**250**の核ミサイルがアメリカに向けて発射されたという報告を受ける。ブレジンスキーは、大統領に連絡する前に事実と意図されている攻撃目標の確認のために、もう一度連絡するように返事するとともに、アメリカは対抗してソ連を攻撃しなければならないと伝え、報告者もすでに飛行機を発射させていると答えた。二度目の電話では、向かってくるミサイルの数は、**2200**であると報告された。それは米ソ全面核戦争を意味していた。ブレジンスキーが大統領に電話する一分前に、第三の電話があり、間違いの警告であることが報告された。のちに、誰かが間違っ、軍事演習用のテープを誤ってコンピュータに入れたことによるものであることが判明した。その夜、ブレジンスキーは、横に寝ていた彼の妻を起こさなかった。**30分**もすればみんな死ぬのであり、寝ながら死んだほうが妻のためにも良いと考えたからである。ほかにも、**1980年9月18日**アーカンソー州の軍事基地におかれていた、原爆を含めた第二次世界大戦中で使われた爆弾の威力の三倍の威力を持つ核ミサイルの通常の点検修理の際に、レンチを作業員が落とした結果、ミサイルを発射させるために貯蔵されていた燃料が内部に漏れ出し、核弾頭を含めたミサイルの爆発の危険が生じたのである。むろん、そのような爆発が起きなかったゆえにわれわれは今でも生きているのであり、その当時アーカンソー州の若き知事であったビル・クリントンも、まだ一歳であった娘のチェルシーも生きているのである。問題は、同種の出来事が頻繁に起きていることである。このような問題について綿密な取材に基づいた本を書いたエリック・シュロツサーによると、内部の事情を一番知る人々がこぞって、何らかの事故により、核戦争や、核爆発が今まで起きなかったのは、奇跡であると語っているそうである⁽³¹⁾。このような事実は、すでに公表されており、筆者も**1980年代**にある程度は知っていたが、それが人々の常識には全くなっていない。人間の愚かさによる不条理な消滅の危機と隣り合わせの生活を余儀なくされている事実は、まさにわれわれにとって、誠実に向き合

うことが困難な現実である。ここで、その現実から目を背けることは容易に理解できる行為である。パスカルが気晴らし（*divertissement*）という言葉で表現した事態と類比的な事態が起きているのである。このような例はわれわれの日常生活の中に数多く潜んでいる。福島事故が何をもたらすかがわかった後にも、あたかもそんな事故がなかったかのような原発再稼働に向けた活発な動き、さらには、短期の利益を確保するためにそれを推進する動きなどは、まさに、現実の困難さから目を背ける態度ということができであろう。同様のことは、セイフティ・ネットによって救われていない自分と違って、それによって生活を何とか支えている人々が自分より公的援助を受ける資格を持っているなどという現実、一見すると生きている様子を見せない人が実はその人なりの生を営んでいるという現実、これらの現実をあるがままに捉えるには、まさに道徳的エネルギーを費やし、注意深く肥え太った容赦ない自我による視野狭窄を乗り越え、事態を正確に公正に見つめるための注意の集中が要請される。このようにマードックが示唆するわれわれ各々の道徳的存在の拡充、豊富化のためには、日々の努力が不可欠なのである。そのような努力なしには、われわれの道徳的存在は、成熟せず、貧弱で紋切り型の思考の枠から自由になることができず、ファンタジーの世界に生きることになる。われわれの日常の中に存在している大きな悲劇や、その可能性、また（大きな差別や格差を生む）とんでもない社会構造の存在など、に正しく向き合うために、マードックの哲学が提供する様々な示唆に耳を傾ける必要があると筆者は考えている。

以上のように、マードックの思想は、われわれの道徳的思考の在り方を変え、それによりわれわれの生き方を変える潜在的力を有する思想である。それ故に、この思想の厳密な検討が重要であり、必要なのである。

参考文献

1. Cavell, S., *Must We Mean What We Say?*, Cambridge UP, 1976
2. Chesterton, G. K. *The Wit, Whimsy, and Wisdom of G. K. Chesterton*, vol.5, Coachwhip Publications, 2009
3. Crary, A. "Wittgenstein and Ethics : a discussion in reference to On

- Certainty” in Daniele Moyal-Sharrock and William Brenner, eds., *Readings of Wittgenstein's On Certainty*, Palgrave-MacMillan, 2005, pp.275–230
4. Crary, A, *Beyond Moral Judgment*, Harvard University Press, 2007
 5. Dennett, D. *The Intentional Stance*, MIT Press, 1987
 6. Diamond, C. “We Are Perpetually Moralists : Iris Murdoch, Fact, and Value” in Maria Antonaccio and William Schweiker, eds., *Iris Murdoch and the Search for Human Goodness*, The University of Chicago Press, 1996, pp.79–109
 7. Diamond, C. *The Realistic Spirit : Wittgenstein, Philosophy, and the Mind*, MIT Press, 1991
 8. Diamond, C. “Murdoch the Explorer” *Philosophical Topics*, vol.38, no.1, 2010
 9. Diamond, C. “The Difficulty of Reality and the Difficulty of Philosophy” in Cavell, Diamond, C., McDowell J., Hacking I., and Wolfe, C. *Philosophy and Animal Life*, Columbia UP, 2008
 10. Jones, N. *Document Friday : False Warning of a “Nuclear Missile Attack on the United States”* <https://nsarchive.wordpress.com/2012/03/02/document-friday-false-warning-of-a-nuclear-missile-attack-on-the-united-states/> 2015. 3. 14. アクセス可能
 11. McDowell, J. “Virtue and Reason” in 13, pp.50–73
 12. McDowell, J. “Values and Secondary Qualities” in 13, pp.131–150
 13. McDowell, J. Non-Cognitivism and rule-Following, in 13, pp.198–218
 14. McDowell, J. *Mind, Value and Reality*, Harvard University Press, 1998
 15. Murdoch, I. *The Sovereignty of Good*, Ark Paper Backs, 1985
 16. Murdoch, I. “Vision and Choice in Morality” in 20, pp.76–98
 17. Murdoch, I., “The Darkness of Practical Reason” in 20, pp.193–202
 18. Murdoch, I., “Against Dryness”, in 20, pp.287–296
 19. Murdoch, I., “The Idea of Perfection” in 20, pp.299–336
 20. Murdoch, I., “On God and Goodness” in 20, pp.337–362
 21. Murdoch, I., I. *Metaphysics as a Guide to Morals*, Penguin Press, 1992
 22. Murdoch, I., *Existentialists and Mystics : Writings on Philosophy and Literature*, Peter J. Conradi, ed., Chatto and Windus, 1997
 23. Pascal B. *Pensées*, Lafuma, L. ed., Editions de Seuil, 1962
 24. Schlosser, E. *Command and Control*, Penguin Books, 2014
 25. Williams, B. *Descartes : the Project of Pure Inquiry*, Penguin books, 1990
 26. Wittgenstein, L. *Philosophy of Psychology- A Frgment in Philosophical Investigations*, fourth ed. P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, eds., Wiley-Balckwell, 2009.

27. 浜野研三「尊厳死法についてのさまざまな考察－殺すことと死ぬに任せることの区別をはじめとして－」, 『人文論究』第62号第1号, 2012年

注

- (1) 参考文献 15, 21 及び, 22 及び 4, 6, 7, 8, 9 を参照。
- (2) この節についての記述は参考文献 16 とその 6 における解説に依拠。
- (3) 参考文献 16 p.88
- (4) この段落は参考文献 6 に依拠。
- (5) この段落は参考文献 12 p.214-216 に依拠。
- (6) 参考文献 6 はまさにこのマードックの主張を説明し, 擁護しようとしたものである。
- (7) 同上 p.82
- (8) 同上 p.92
- (9) 同上 p.102
- (10) 両表現とも参考文献 6 p.103 において言及されている。
- (11) 参考文献 6 p.96
- (12) 同上 p.97
- (13) 以下の記述は, 参考文献 11, 13 に依拠。
- (14) 参考文献 11 pp.60-61
- (15) 参考文献 1 p.52
- (16) 参考文献 13 p.61
- (17) このマクダウェルの議論は, 参考文献 12 を参照。
- (18) デネットの議論については, 参考文献 5 を参照。
- (19) ウィリアムズズ概念については, 参考文献 25 pp.65-66
- (20) 参考文献 26 p iv. 22
- (21) 参考文献 20 p.342
- (22) 参考文献 19 p.327
- (23) 同上 pp.312-318
- (24) 同上 p.313
- (25) この点については, 参考文献 27 を参照。
- (26) チェスタトンについては, 参考文献 2 を参照。
- (27) 参考文献 9 p.54
- (28) 参考文献 23, 423
- (29) 参考文献 4 p.139
- (30) 参考文献 10 を参照。
- (31) 参考文献 24 を参照。